

6) マユミ=檀/真弓

マユミはニシキギ科の落葉低木で、高さは3m 楕円形の葉は対生し、縁には細かい鋸歯がある。初夏葉腋から花柄を伸ばし淡緑色の、10数個が密集した4弁花を開く。雌雄異株で、秋には四角い淡紅色の仮種皮(カシュヒ)に覆われた果実を付ける。仮種皮は完熟すると4裂して中から赤い種子が現れる。和名の由来は昔この木で弓を作ったことによるとする説が有力である。別称としてはヤマニシキギ、ユミギ、メギなどといわれている。学名は『*Euonymus sieboldianus*』、属名は前述のとおりで、種小辞は「シーボルトの」という意味で、中国では『桃葉衛矛』と呼ばれている。

マユミの材は堅く緻密であるために、将棋の駒や箱もの、こけし、玩具などに用いられ、若芽や果実は食用にもなる。また紅葉の美しさも格別で、盆栽や庭木としても植えられ、栽培の歴史も極めて古い。『源氏物語』の「篝火」(カガリヒ)には、「いと涼しげなる遣水(ヤミヅ)のほとりに、けしき殊(コト)にひろごり臥したるまゆみの木の下に…」と記されており、当時から邸内で栽培されていたことがうかがえる。また『古事記』の「仁徳記」の歌謡には以下のように記されている。

ちはや人 宇治の渡(ワタ)に 渡り瀬に 立てる 梓弓(アズヤミ)檀弓(マユミ)
 い伐(ハツ)らむと 心は思へど い取らむと 心は思へど 本方(モト)は 君を思ひ出
 末方(スエ)は 妹(イモ)を思い出 苛(イラ)なけく そこに思い出 かなしけく ここに
 思い出 い伐(ハツ)らずぞ来る 梓弓檀弓(アズヤミマユミ)

この意味は、宇治川の渡し場に立っている梓や真弓の木で作った弓で、相手を討ち取ろうと思うけれど、父天皇(応神天皇)のことや、相手の大山守命(オオヤマモリノミコト)の妹のことなどを思ってイライラと気を遣い、あれやこれやと思い出して悲しくなり、討ち取らないでそのままにしておく。というものである。この歌謡は宇遅能和紀郎子(ウジノワキイラツコ=後の仁徳天皇)が、攻めてくる兄の大山守命の軍と、戦ったときのものといわれている。応神天皇は遅能和紀郎子を後継天皇と定めていたが、これを阻止しようとした兄の大山守命が、宇遅能和紀郎子を、攻め滅ぼそうとした時のものである。しかし大山守命は川に流されて溺死する。

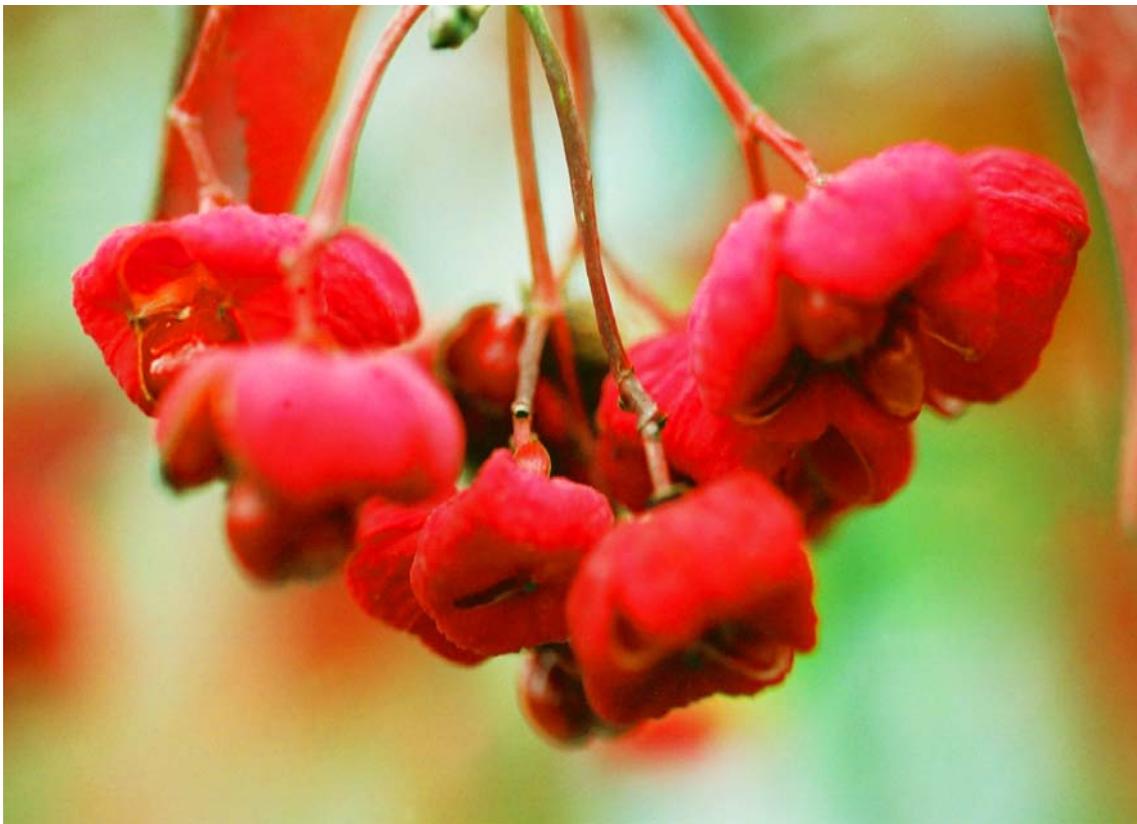
さらに『万葉集』には作者不詳の歌として以下のようなものがある。

南淵(ミナブチ)の細川山に立つ檀(マユミ) 弓束(ユヅカ)巻くまで人に知らえじ
 この歌の表の意味は、飛鳥川の上流にある南淵の細川山に生えている真弓の木に、弓束を巻き付けて、弓を完成させるときまで人に知られたくない。というもので、恋が実るまで他人に二人の仲が知られずにいたい、という裏の意味がある。

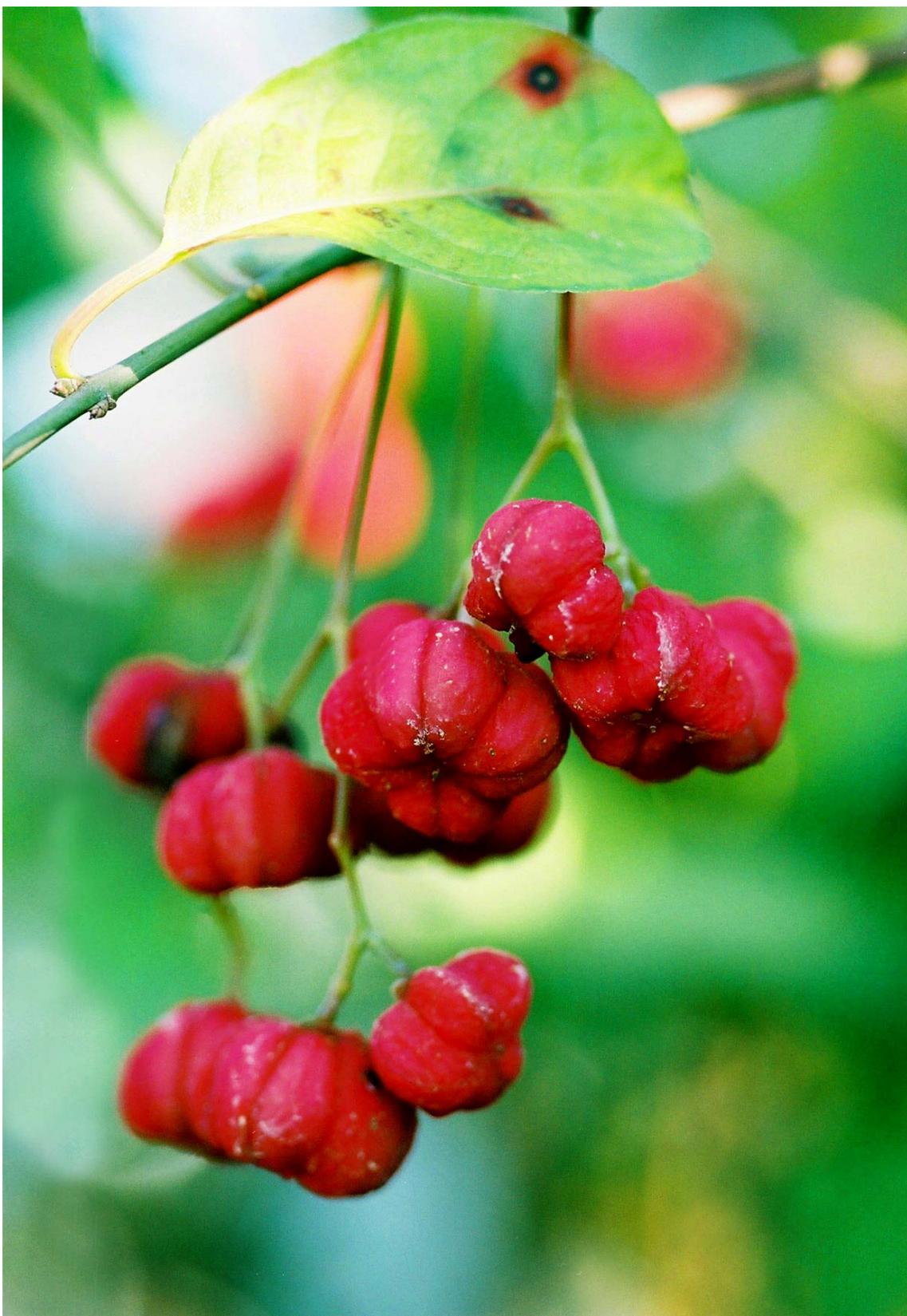
このように真弓は弓を作る材料にされたことから特別の木となり『出雲国風土記』や『播磨国風土記』にも現れ、檀紙(ダンシ)といわれる上質な和紙の原料としても用いられていた。平安時代になると和紙は中国からの伝来技術により、楮(コウゾ)で作られるようになるが、この頃は真弓や錦木などでも作っていたのである。



マユミは雌雄異株でこれは雌株の雌花(千葉市若葉区泉自然公園)。



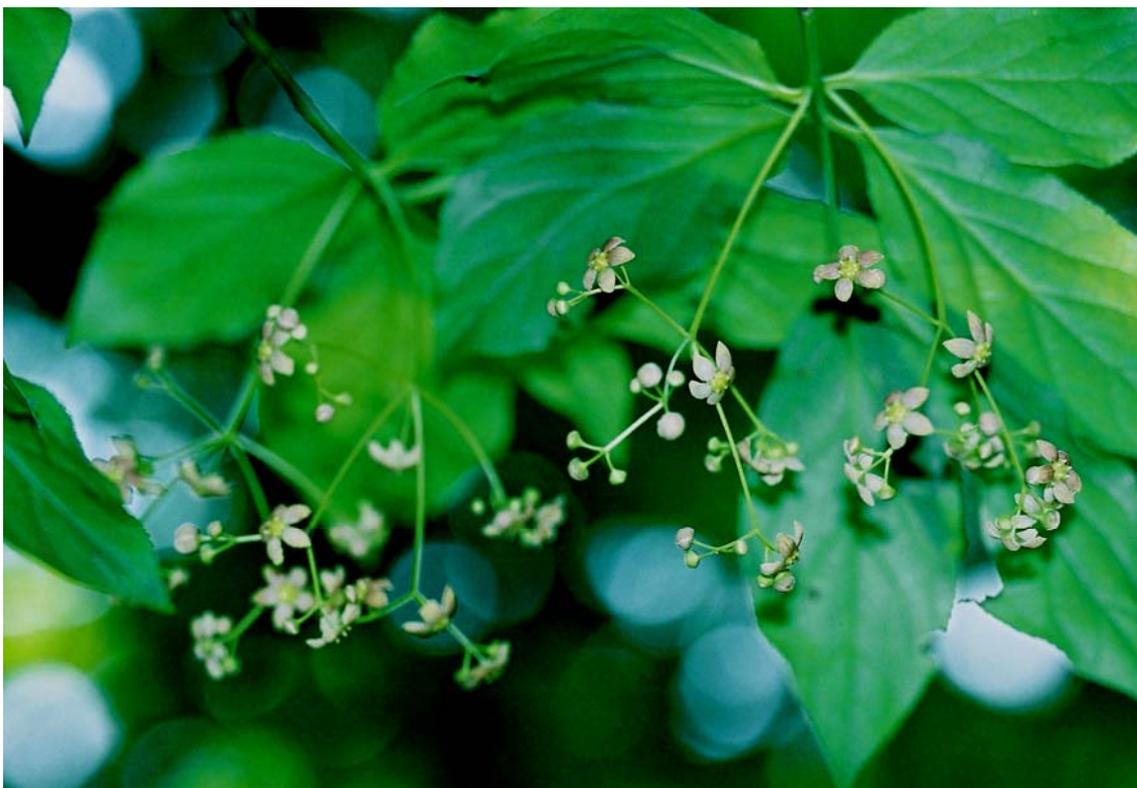
マユミは紅葉も熟した果実も、真っ赤になって美しい(さいたま市大宮区)。



マユミの種皮は赤いものと白いものがあり、それぞれ紅マユミ、白マユミと呼んでいる。一般的には紅マユミが好まれるが、種皮が裂けると白マユミの本領が発揮される(さいたま市大宮区)。



赤い果実がすっかり露出した白マユミ。絶妙なコントラストである(さいたま市大宮区)。



同属種のツリバナマユミ『*Euonymus oxyphyllus*』の花、花柄がマユミよりも細く長く、風にそよぐところからツリバナの名称となった(長野県軽井沢町)。



ツリバナマユミの果実、やがて種皮がはじけて赤い種子が垂れ下がる(長野県軽井沢町)。



ツリバナマユミのはじけた果実 (長野県軽井沢町)。



びっしりと実ったツリバナマユミの果実(長野県軽井沢町)。

[目次に戻る](#)